
学園黙示録の世界に転生してしまいました。

螺刹仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録の世界に転生してしまいました。

【Nコード】

N9187M

【作者名】

螺刹仁

【あらすじ】

普通の一般人が学園黙示録の世界へ転生してしまうお話

(注：TS要素あり)

プロローグ（前書き）

頑張ります！

ブローグ

ここはどこだ？

辺り一面真っ白け

何なんだろうね？

そして・・・

「ホントーに申し訳御座いませんでしたあああああ！！！！」
「！」

この女性は誰？

「神です！」

神かよ！

あ、え？髪？紙？

「いや、神です神様です！」

え？ああ、そう

「リアクション薄いですね」

いや、何かめんどくさくて

「めんどくさいって言われた・・・」

ていうかここはどこ？

「あ、ここはですね！

所謂、天界とか神界ですよ！」

そーなのかー

「そーなんだー」

・・・で、何で謝ってたの？

「うう、ツツコミがなかった・・・

謝っていた理由はですね・・・

あなたを間違えて殺しちゃったからです」

・・・あゝ

俺は死んだの？

「はい、あなたは歩いていて石に躓いて倒れる先にあった犬のフンを必死に避けた結果壁に頭を強打して死んでしまったのです」

何その間抜けな死に方

どうせなら子供を助けるためにトラックに轢かれるとかがよかったよ

「テンプレですね

ですがあなたは本来はあそこで死ぬはずだったのです

あなたが無理にフンをよけるから！」

う。こがド根性ガエルのようにベチャッて張り付くくらいなら死んだ方がましだ！

「そんなの洗えば済む事なのに・・・」

じゃあ聞くが君はうん。がベチャツと付いた服を例え洗ったとしても再び着ようと思うかね？

「そ、それは・・・」

綺麗に洗ってもちよつとシミが付いていたりしても着られるのかね
！？

「う、ごめんなさい・・・」

分かればいいんだよ

「ま、まあ兎に角、間違いで死なせてしまったお詫びに転生させて
上げます！」

あら、そうなの？

「はい、同じ世界は無理ですから何か希望の世界がありますか？」

希望の世界ね

あんまりないから
何か刺激的な世界で

「はい、分かりました
特典のようなモノがありますが」

特典？

「まあ所謂、チート能力とかこんな姿がいいとかそんなですよ」

ああゝ
なるへそゝ

うゝん、あんまり無いなあゝ

「そうですかゝ
あ！貴方は死んじやう前に楽しかった事とか楽しみにしてたことと
ありませんでしたか？」

あんまりないかなあゝ

どうせ帰ってもニコ。コ動画でボカロ見てるだけだし

「ボー。ロイド、好きなんですか？」

まあ、好きだけど

どのくらい好きかと言うとボカロを買って自分で作曲するくらい好きだけど

まあ・・・

すぐに才能のなさに気づいて半日近く

orz↑この状態だったんだけどね・・・

「あ、あははは・・・じ、じゃあ、もう希望はないですか？」

あ、女の子になってみるのも面白いかも

なんてね

「なるほど・・・
分かりました！」

半分冗談だったけど・・・

まあいいかい直すのもめんどくさいし・・・

「それじゃ」

転生します！

頑張ってくださいね！」

ああゝ

何か意識が・・・

てか、神様なのにそっち方面が結構詳しかったな・・・

第一話・頑張れたら頑張りました・（前書き）

僕は一体何がしたいかよく分からなくなってきた・・・orz

それはそうとprojectDIVA2nd 面白いなあゝ

激唱のエクストリーム難しいわあ

てかあれは難易度エクストリームであってるのか？

めっちゃWが思い浮かぶんだけどw

第一話・頑張れたら頑張りました・

どうも、俺です

転生しました。

以上

え？これだけじゃダメ？
めんどくさい・・・

え〜と、ですね

神様に転生させられて

「あぶ〜」

今こんな状態

うん、あの後、赤ちゃんとして生まれました。

「頑張ったなあ！真理亜！」

「うん、元気な赤ちゃんが産まれてよかった」

今両親と思われる方が俺を抱き上げ話しております

ちなみに空気は読んで産まれた瞬間は大声で泣きましたよ？

「名前は何にしよう？」

「うーん、女の子だから『白亜^{はくあ}』何てどう？」

そうなんだよね、俺、女の子として生まれました！

神様マジで実行するとは・・・

体は女、心は男のままだと、いずれはレズに・・・

いや、まあそれでもいいか

「いい名前じゃないか！よし！お前は今日から『再音^{さいおね} 白亜^{はくあ}』だ！」

再音 白亜・・・それが俺の新しい名前か・・・

白亜は・・・まあ格好いいからいいとして・・・

再音 って珍しい名字だな・・・

まあありきたりな名字よりは格好いいな！

ていうか女の子になった訳だから『俺』じゃなく『私』にしようかな・・・

自分で自分の順応力の高さに驚くな・・・

・・・

キ。グクリ。ゾンとでも言おうか・・・

私、5歳になりました。

飛びすぎ？

だって赤ちゃん時代はマジで何もありませんよ？
前世の記憶持ちだから赤ちゃん時が退屈すぎて・・・

さて、これまでに分かった事は

私は両親とかなり似ていない事

うん、鏡見るとね

かなり似てないよ？

髪が生まれながらに白髪だし

目が赤色だしね

ていうか、コレ、あのボー。ロイドの亜種の『弱音ハク』じゃないか？

何で？

・・・アレか？

神様にボカ口を買ったけど自分の才能に絶望したって言った上に女の子になつてみたいと言ったからハクになっちゃったの？

流石神様、その発想はなかった。

まあ、いいか、なかなか好きなキャラだったし

「白亜、鏡を見つめてどうしたんだい？」

「おとうさん、わたしはなんで髪がしろくて目があかいの？」

「うーん、それはお父さんにも分からないんだ
でも心配するな！」

白亜はちゃんとお父さんとお母さんの子供だからな！」

「うん」

まあ、『生まれつき』で片付けるしかないですね

ああ、それとこの世界がどういった所かはまだ分かっていません

神様に刺激的な世界って言いましたけど
普通なんですよ

まあもう少しこの世界を見ていますか

・
・
・
・
・
・
・

・
はい、私、１０歳です

小学４年生です。

あるかな？とは思っていたんですがやっぱりありました。

イジメ。

まあ髪が白くて目が赤いんじゃないイジメの対象になりますよね？

でも私は外見年齢１０歳ですが精神年齢が２０歳こえてますから
イジメられた所で何も感じませんでした

まあ、流石に机に落書きとかノートや教科書などを無茶苦茶にされた時は多分コイツらだろうって奴らの机の中にミミズ一杯詰め込み
ましたが

いや、まあ教室が大混乱でしたがね

ああ、それと２年生に『小室 孝』『宮本 麗』『高城 沙耶』と
言う子たちがいるのですが・・・

はて？どこかで聞いた事のある名前なんですよ

何でしたっけ・・・？

何か、前世で読んだ漫画にそんな名前のキャラがいたような・・・？

思い出せませんね

まあ、別に急ぐ事じゃないのでいいですけど

そうそう、小学生なので結構無双できますよ

テスト100点無双

今まで100点しかとったことありませんよ

まあ精神は20歳なんだから小学生の問題が解けなかったらそれはそれで駄目なんですけど

・
・
・
・
・
・
・
・
はい、私、15歳です

もうすぐ高1です

イジメは流石になくなりました

中2のころはイジメどころか格好いいと言われてました。

男子に。

そうそう、1年生に小室君達が入学してきたんですが
ますますどこかで見たことのある姿に・・・

本当にどこかで見たことがあります

何でしたっけ？

何かこう、かなり刺激のある漫画の登場人物だったような・・・

・・・まあいいです

その内思いだします。

・
・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

はい、私、18歳です

高3ですね

高校は藤美学園と言う所です

やつと思いだしました。

ここは多分『学園黙示録』ですね

2年生にいる『毒島 冴子』さんと校医の『鞠川 静香』先生を見て完全に思い出しました。

刺激的な世界と言いましたが刺激ありすぎる世界ですね。

まあ、いいでしょう

いや、よくないような・・・？

それは兎も角

この弱音ハクと酷似した体の能力が分かりました

はい、“頑張れば”結構色んな事を覚えられるという・・・

確か弱音ハクの設定が何かで最初は上手くなかったけど今はむしろギター、ベース、ドラムと多岐に渡ってかなりの腕を披露することが出来るってあったような？

なので結構頑張りました。

高校からだけと柔道、空手に剣道と頑張ってみました。

頑張りすぎて寝不足で目の下にクマが出来てしまいましたよ

何か無駄にハクに近づいたような・・・

まあ、頑張った結果、そこそこ強くなりました。

ていうか、よく部活を3つも掛け持ち出来ましたね。

基本めんどくさがりの私がよくこんな事をできたものです。

おかげで毒島さんと仲良くなりました。

あと井豪君とも仲良くなりましたよ。

原作キャラと仲良くなれてよかった・・・

でも、確かゾンビ達が出てくるのは私が卒業した後・・・

生き残れるか心配すぎる・・・

いや、まあ、なるようになるでしょう。

主人公紹介（8月5日更新）

【再音 白亜】（さいね はくあ）

主人公

躓いて倒れる先にあつた犬のフンを必死に避けた事により壁に頭を激突させるという間抜けな死に方をして学園黙示録の世界へ転生した普通に一般の方

何故か知らんがボーカロイド亜種の弱音ハクの容姿で転生した。

一応言うが元男

ちなみに前世の名前は

【井上 いのうえ 敦史 あつし】

めんどくさがり

お酒好き

お酒があれば飲み続けるがアル中とかじゃない
焼酎などが大好き

弱音ハクの体が意外にスペック高い事について最近気がついた

チンピラを撃退出来るレベルには強い

剣道、柔道、空手と部活を三つ掛け持っていた。

一応ボーカロイドなので歌を練習してたりしていた
そこそこ上手くなった。

あと一応ギターとか弾けるがこれもそこそこ上手いレベル

どうでもいいが結構巨乳

元男なので胸が大きくなってるのを微妙な心境で見てる。

普段着は弱音ハクの服にかなり似た服を着ている

でもコスプレっぽくなるのでギリギリコスプレなようにコスプレじゃない感じに改良している

意外にノリノリである。

白髪で長髪

赤目

髪はひとまとめにしてある

バイト先はマクド○ルド

10:00〜17:30まで働いている

現在19歳

精神年齢は39歳、だが精神が肉体に引っ張られるのか枯れていない、むしろピチピチ

「その他の人物」

【美浦 加奈子】（みうら かなこ）

バイト先の先輩

気さくで面白い人

22歳 彼氏募集中、もう彼女でもいいから募集中

バイトでは白亜とほとんど一緒にいる。

悩みが無いと思えるほど常に笑顔の人

しかし、平均と比べてちょっと胸が小さい事を気にしている

きつとこう言う人は怒ると凄く怖い。

第二話・生き残るために頑張りました・

どうも、白亜です。

両親が死にました。

車での衝突事故です。

ですが涙は出ませんでした。

それは前世の記憶を持っている事により二人を親と覚えていなかったのか

ショックで混乱して涙が出なかったのか、それは分かりません

でも、もう二人の笑顔を見れなくなるのは悲しくてたまりません

ですがあまり悲しんではかりでは両親に怒られてしまいます。

頑張って生き残ります！

まあまずは・・・

やっぱり学校を辞めるしかないですね・・・

両親の貯金があるのでまだ大丈夫ですが学費を払っていたらあつと言つ間になくなってしまいます。

もう少しで卒業だったんですが残念です。

・
・
・
・
・
・
・

「再音先輩！

退学とはどういう事ですか！」

「毒島さん・・・」

どこから聞いたのでしょうか
私が帰ろうとした所に毒島さんが駆けて来ました。

「両親が亡くなってしまったので学校に通えなくなつたんですよ」

「そう・・・なんですか」

「はい、幸い両親の貯金が結構あるのでバイトをしながら生活しようと思っているんです。」

私のために悲しんでくれるのは素直に嬉しいですね

でも

「いつでも会えるんですからそんなに悲しそうな顔をしないで下さい」

「・・・わかりました。」

ですが何か困り事があれば遠慮なく私に言ってください」

「はい、ありがとうございます
それでは、また」

そう言い私は学校を出た。

・
・
・
・
・
・
・
バイトですが

なかなか見つかりませんね

まあ私にも原因はあるんですが

髪を染めるとか髪を切れなど言われたら諦めています

流石に髪を染めたり切るのはちょっと・・・

路上で歌でも歌って稼いでみましょうか・・・

ワー。ドイズ。インとか・・・

ニコ厨すぎますか

ワール。イズマイ。はいいとして・・・

どうしましょう？

グウ・・・

「おや、お腹が・・・

そう言えば朝から何も食べてませんし、ちょっと早いですがお昼に
しましょう」

私は近くのマク。ナルドに入りハンバーガーとポテトを注文し、席に座る

「あ、ここは私を雇ってくださいませんか？」

食べた後に聞いてみますか

・
・
・
・

ハンバーガーとポテトが出来上がったようなので取りに行き、食べる

「何だか久しぶりにハンバーガーを食べましたねえ」

美味しい美味しい

ん？

そう言えばさっきから他のお客さんがチラチラと私を見てるような？

まあ大方

髪を見てるんでしょう

長いし白いし

それはそうと今後の事をちよつと考えましょう

確かゾンビ・この世界ではく奴らゝでしたか・がこの世界に広がるのはまだもう少し後のはずですよね？

私、内容をもう殆ど覚えてないんですよ

電磁パルスとかはうつすら覚えてますが・・・

まあ兎に角、ゾンビ天国になる前にバイトを見つけて稼いでみましょうか

まあ、パンデミックになったら稼いだモノが全部無駄になりますかね

「さて、食べた事ですし雇って貰えるか聞いてみましょうか」

無理ならまた探しましょう。

第三話・バイト頑張りましょう・

どうも、白亜です。

仕事が見つかりました。

この間のマク。ナルドです。

取りあえず面接を受けたら意外にあっさり受けました。

髪のをまったく言われなかったので安心しました

さて、今日も頑張りましょう。

「いらっしゃいませえ、ご注文は如何いたしますか？」

「えーと、って再音先輩!？」

「おや、井豪君、こんな所で奇遇ですね」

なんと、後輩の井豪君と再開しました。

まあ、ここは藤美学園の生徒もよく来るので可能性はあった訳ですが

「先輩・・・」

いきなり退学したって聞いて驚いたんですよ
ここで働いていたんですね」

「はい、両親が亡くなってしまったのでバイトをして生活しようと思ひましてね」

「そうだったんですか・・・」

「おい、永？どうしたんだ？」

おや、小室君ですか永君が来るの遅いから見に来たようですね

「あ、ああ、すまん

部活の先輩に偶然会ってさ」

「元ですがね元

まあそれはそうと井豪君、他のお客様にご迷惑をかけてはいけないので注文をしてください」

あとあんまり話していたら私が怒られてしまいます

「あ、ああ、すみません！」

そう謝り井豪君は注文をして小室君と席へ歩いて行きました。

あ、宮本さんもいますね

3人で来ていたようです。

・
・
・
・
・

さて、そろそろ休憩ですね

お腹がすきました

お弁当を食べましょう

ちなみにお弁当は自分で作りました

まあ、これもそこそこ上手いんですがね

二つの意味で

「あ、再音ちゃん、お疲れ〜」

「あ、お疲れ様です。

美浦さん」

この人は『美浦 加奈子』さん
この職場の先輩ですね

なかなか気さくな人です

「お腹減った」

お昼お昼」

嬉々としてお弁当を食べた初めました。

面白い方です。

私も食べましょう。

・
・
・
・

お弁当を食べていると美浦さんが何かジーンと私を見えています

「どうしました？」

「再音ちゃんって胸大きいねえ」

なるほど胸を見ていたんですね。

「……いきなり、どうしました？」

元男として胸が大きいのはあんまり喜べないのですよ

「ん〜ん、目についたから言ってみただけ
再音ちゃんは彼氏とかいるの？」

「いませんよ、というか欲しくありませんし」

これも元男ですから男を好きにはなれませんか、今は。

「ふーん、再音ちゃん可愛いからいるのかとおもったよ」

「あ、あはははは……」

弱音ハクまんまの容姿ですしね……

・
・
・
・
・
・

・

「ふう、終わりましたか」

今日のバイトが終了しました。

なかなかお客さんが多かったです。

さて、帰りますか・・・

帰り道の途中にある

コンビニに寄ってお酒を買います

え？未成年？

だってお酒が好きなんですもん

それにバレなければ大丈夫ですよ

それじゃ、家に帰って夕食を食べてお風呂に入って寝ますか・・・

第四話・武器を揃えましょう・

どうも、白亜です

最近ふと思うんです

神様・・・

私は弱音ハクと言うキャラクターの容姿まんまになっていますが、この学園黙示録の世界で何のメリットがあるんでしょう？

ま、いいですがね

さて、今日はバイトが休みなので家でのもんぶり・・・とはいけないんですよね

来るべき日に備えて武器を調達しないと・・・

めんどくさい・・・とも言ってられませんよね

それにしても武器ですか・・・

銃を普通に買えるわけがありませんし・・・

威力のある身近にある物がいいですかね

とは言ってもすぐに使える武器が一つありますが

前にネットで買った・・・

ああ、ありましたね

スリングショットです

ブラックコブラと言うらしいですよ？

何でこんなものを買ったかと言うと

まだ今以上に男の心が残っていた時にネットサーフィンしていたら
偶々見つけ、格好良かったので衝動買いしてしまいました

親には内緒で。

さて、これはかなり高威力であると思うのですがパチンコ玉だけじゃなくそこらの石でもすぐ弾に出来ますしダーツとかを弾として発射すれば強いでしょう

銃と違ってあまり大きな音は出ませんし
まあ一発撃つのに少し時間がかかりますけど

これだけじゃまだ心もとないので
あと、何か武器を探しましょうか・・・

・
・
・
・
・
・
・

と、言うわけで買って来ました。

エアガン。

取りあえずこのままじゃ絶対にダメージを与えられませんので、改
造を・・・

えーと、分解して・・・バネを厳ついのに変えて・・・

少？女改造中・・・

「ふぬぬぬ！」

ガチン！

バンッ！！

「おおー」

缶が貫通しましたね

なかなか凄いですね

というかよくデタラメにした改造で威力上がりましたね・・・

ですがバネが強くて固い・・・
コレも一発撃つのに時間がかかりますね・・・

もう少し試し撃ちを・・・

ガキン！

バン！

ガチン！！

バンツ！！

・
・
・
・

ガキヤ！

バゴン！！

「ふおっ！？」

こ、壊れました・・・

プラスチックのエアガンなので衝撃に耐えられなかったのでしょうか・・・？

何という事でしょう・・・

凄く無駄なことになりました・・・orz

しょうがないですね

遠距離はスリングショットに任せましょう

近距離は木刀やバットを使いましょうか。

あと何か武器は・・・

確かドライアイスで爆弾みたいな物を作れると聞いたような？

駄目ですね

作り方が分かりませんし

簡単な燃烧弾のような物は作れますがこの世界のゾンビ達は燃やしても意味がなかったはず・・・

あとは長い棒に包丁をつけて槍にするとか・・・

槍術は出来ませんし、すぐに壊れそうなので却下

まあ、スリングショットと木刀などで大丈夫ですかね？

いや、何か怖いですね・・・

ううーん・・・

め、メリケンとか・・・

殆ど素手だから駄目ですか・・・

うにゅううー

大・・・丈夫だと思い・・・ます？

じ、自身を持ちましょう！

まだ時間はあるんですから！

落ち着いて行きましょう・・・

第五話・防具などを揃えましょう・（前書き）

思いつき

皆さんに言われた事を実行しておりますorz

第五話・防具などを揃えましょう・

なるほど、クロスボウですか・・・

スリングショットよりかなり威力高いですよ

私は今、ネットで武器とか防具とかを調べています。

ですが高いです・・・

クロスボウはもう自分で作ります

あと、防具ですかね・・・

・
・
・
・
・

と、言うわけで

隣の軍用品店まで来ました！

隣町まで行かないと無いんですよえ・・・

さてさて、防具防具

ふむ、防弾コート・・・

ふむふむ・・・

これはいいかもですね

意外と売ってるものなんですね・・・

これでロケットランチャーを持ったら若干完璧ですね

何が？とは聞かないでください

あと、防刃グローブも一応買いたしうか・・・

鉛入りとは・・・

人間の頭って瓦より堅いんですかね？

空手部でしたので瓦割りは出来ます

まあミスターサ○ンみたいには割れませんが

あと、タクティカルブーツなどを・・・

ううむ、この三つだけで既に7万を超える始末・・・

なんという事でしよう・・・

まあいいでしょう・・・買いますよ・・・

最悪１ヶ月もやし生活だつてやってやります（キリッ）

まあ両親の遺産がそこまで少ない訳ではありませんが

なんというか・・・ここまでお金使っんならクロスボウも買ったや
えばいいんじゃない・・・？

ま、まあそれは今は置いておきましょう・・・

取りあえずお会計を済ませて、っと

後は単一の電池を買いましょう
多めに。

懐中電灯が必要かもですしね

あとは・・・ラジオっていらいますかね？

ゾンビだらけの中ラジオは放送するのでしょうか？

あと電磁パルスの影響も受けたりしないのでしょうかね？

・・・ラジオはまあいいでしょう・・・

あとは・・・

缶詰めとかカンパンとか・・・

そこらのコンビニに行けばすぐに食料調達出来そうですね

でも一応って事で買っておきましょうか・・・

あとは着火マンとか・・・

怪我した時の医療キットとか

怪我した時が最期の時でした、なんて事にならなければいいですが、
・
・

まあこのくらいですかね？

じゃあ買いに行きますか・

・
・
・

・

なかなか多荷物になりましたよ

まあ取りあえず今日は帰りましょうか・・・

ああ、そう言えば

もしかしたら、と思いましたが会えませんでしたね

平野君とは。

「ふう・・・」

ああ、今日1日、お金に羽が生えたようでした・・・」

飛んでいつちやいました。

レジと言う夢の箱の中へ

あとエアガンが本当に勿体なさすぎましたね・・・

うう・・・

まあいいでしょう・・・

明日もバイトですし

今日は早く寝ましょうか・・・

第六話・日常を満喫しておきましょう・（修正済み）（前書き）

今回はただの日常です

次回から原作になるかもですね！

第六話・日常を満喫しておきましょう・（修正済み）

「せかいで」

いちばんいいところ」

・・・おや？何か歌詞が違ったような？

あ、どうも、白亜です

今はバイトの休憩中です

ああ、お弁当が美味しい・・・

あ、そうそう

あれから数ヶ月が立ち

毒島さんは3年生に小室君達は2年生になりました。

もうそろそろですか、世界の常識が終わるのは

出来る事ならこのまま平穏に暮らしたいですね

「ねえねえ、今の何の歌？」

「ふおおお！？」

いつの間に！？

「み、美浦さん・・・
何時からいたんですか？」

「ん？

えとねー、再音ちゃんが歌を歌ってた時から」

「あ、最初からいたんですね」

私が考えていた時に寄ってきたわけですか・・・
後ろにピタリと。

「ビックリするので突然声をかけるのはよしてくださいね」

「ふふふ・・・」

何ですかその何か企んですよ？みたいな笑みは・・・

「ま、冗談はこれくらいにして、私もお弁当食べよう」と

嬉々としてお弁当を食べ始める美浦さん

この人は世界の全てが楽しいんじゃないでしょうか

「再音ちゃんってさ

休みの日は何してるの？」

武器集めです。

何て言えませんか

「何もやることの無い日は家で腕立てとか空手、柔道の練習とかしてますね」

あとたまに毒島さんの家に行って剣道の練習もしています

毒島さんが冗談抜きで強いですよ

「へえー！！」

「凄いね！」

「でも疲れてる時とかは何もせずにお酒飲んでテレビ見てます」

「……あれ？再音ちゃんって未成年……」

「それが何か？」

「駄目じゃん！」

「いいんですよ、バレなきゃ
だって好きなんですもん」

焼酎とか大好きですね

ビールもいいですがやっぱり焼酎ですね

「うーん、好きなんじゃないかあ」

あ、それで納得してくれるんですね

・
・
・

・ ・ ・

「お疲れ、再音ちゃん！」

「あ、お疲れ様です

先にながりますね、美浦さん」

「うん、じゃねー！」

さてさて、バイトも終わったし帰りましょうか

・ ・ ・

「ぽっぴぽっぴぽ

ぽっぴぽー」

「えっと、もしかして、先輩？」

「ベジタブルになって、おや？井豪君じゃないですか奇遇ですね」

井豪君の後ろには宮本さんが・・・

デート？

藤美学園は全寮制ですし・・・

やはりデート？

もう夕暮れですし違いかもしれませんね

宮本さんに「誰？」と聞かれ

「先輩だよ、覚えてないか？」って言っていますね

ていうか私ってもう学校から忘れられているのでしょうか・・・

まあ余り目立ちはしませんでしたけど白髪、赤目と部活を三つ掛け持ちしてたのでそこそこ有名だったのですがね

私はれっきとした純日本人ですよ

「先輩はバイト帰りですか？」

「ええ、そう言うあなた達は？
デートですか？」

ニマニマしながら言ってみたら

「い、いえ！商店街に用事があつて来たんですよ！」

顔を若干赤くして答えてくれましたよ

「ふふ、そうですか」

デートではありませんでしたか

まあ制服のままデートはしませんかね。

「先輩はもう帰るんですか？」

「はい、今日は中々疲れましたので、家に帰ったら夕飯を食べてお風呂に入っのんびりして寝ます」

のんびりは重要ですよ！

「そうですか、じゃ、俺達は行きますね」

「はい、それでは。」
さて、それじゃ帰りますかね

第七話―取り合えず逃げまじよう―（前書き）

原作？

まあゾンビ大量発生のおしらせ

第七話―取り合えず逃げましょう―

どうも、白亜です。

ピンチです、ヤバイです、超マズイです。

いるんですよ！

私の目の前に！

「あゝあゝ」

ゾンビが！

ま、まさか今日が非日常の始まりだったとは……
いつも通りに起きてバイトに行こうと道を歩いていたらいましたよ！

驚いて鞆を落としてしまいましたよ……

大丈夫だろうと思っていましたが直に見るとエグいですしグロいです……

吐けなかった自分にご褒美をあげたいぐらいです。

それはそうと鞆を落としてしまい

音を立ててしまったためゾンビさんが私に近づいて来ているんですよ

ピンチです、どうしよう・・・？

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、逃げればいいんです」

驚きすぎてその選択肢がありませんでした・・・

・・・・・・・・
ふう・・・・・・・・とりあえず逃げましたが・・・

何と結構います。

ウロウロしてます。

取り合えず、一応と言うことで持っていた。
スリングショットを出して置きましょう。

いつも鞆に入れておいて良かった・・・

他の武器はまったく入りませんでした。

私は一緒に入れておいた小さな鉛玉を思い切り引き絞りゾンビの頭を狙い撃ちます。

「あゝっ！」

鉛玉はゾンビの頭を抉る

おお・・・あたりましたね・・・
しかも意外に倒せますね

頭を貫通はしませんでした、脳の部分に撃ち込めば行動は停止するようです

銃声のような大きな音は出ませんからこれはゆっくり殲滅できますね。

多すぎる上に囲まれかけたらすぐに逃げますけど。

よし、このまま家まで一旦帰りましょう。

・
・

・ ・ ・ ・ ・

「さて、家へと帰って来たわけですが・・・」

あんまり大荷物だとダメですね

最低限必要なものだけ持っていきましょう。

少し大きめのリュックに色々詰めていきます。

えーと・・・

缶詰、飲み物、懐中電灯、スリングショットの玉になるもの
c . . . e t

まあこの位でいいですかね。

あと木刀は何処に持って置きましょうか・・・？
すぐに抜けるようにしたいですね。

腰につけて置きましょう。

私は防弾コート、防刃グローブを装備する。

ちよつと変な感じになっていますがまあいいでしょう。

玄関へ行きブーツを履き外へと出る。

「・・・カギは開けて置きましょうか
もしかするとこの家に逃げ込む方がいるかもしれませんし」

そう言い私は歩き出す。

「さて、何処に行きましょうか
出来る事なら小室君達と行動したいですし・・・
高城さんの家に行きましょうか」

あそこは確か難民キャンプみたいなのをやっていたはず・・・

それじゃ、目的地は高城さんの家として行きましょうか。

・ ・ ・ ・ ・

・

主人公装備一覧

頭——リボン（髪をひとまとめにするために使っている、弱音ハクのような巨大なリボンは見当たらなかった）

上半身——防弾コート（追跡者のと同じような物、黒色）
弱音ハクのと酷似した服

手——防刃グローブ（鉛入り、殴られると凄く痛い）

下半身——弱音ハクのと酷似したズボン、タクティカルブーツ

武器

- ・スリングショット（主にコレを使う）
- ・木刀（かなり近くにきたゾンビを叩き割る）

クロスボウは結局作れなかった。

第八話―相変わらず生き残るため頑張りました―（前書き）

昨日リアル心霊体験してしまった・・・orz

第八話―相変わらず生き残るため頑張りましょう―

どうも、白亜です。

パチスロへ行こう！

……いえ、すいません。

パチンコ屋にならスリングショットの玉が腐る程あるでしょうし
なので高城さんの家へ行く前にパチンコ屋へ行ってみますか

「こんな状況じゃなければ、歌でも歌ってるんですが……」

歌ったらエサになっちゃいます。

・
・
・
・
・
・
・

「ふう、何とかここまで来ましたね」

ある程度ゾンビを倒しながらパチンコ屋の近くまできました。

「普段ならばすぐに来れる道のりなのに時間がかかりました・・・」

恐るべきゾンビ・・・

怖いです・・・

「おお、着きましたね
行きましょうか」

・・・おや？

そう言えばパチンコ屋の周辺にゾンビ達がいませんね？

どうしたのでしょうか・・・？

その疑問はすぐに解決しました。

「・・・困りましたね

よく考えればすぐにわかった事なのに・・・」

ゾンビがない理由・・・

それはパチンコ屋が五月蠅いからですよ！

そうでしたあ・・・

忘れてました・・・

パチンコ屋の中にゾンビが沢山います

コレは・・・無理でしょう・・・

ここに突撃する勇氣はまったくないです・・・

うーん・・・

何とかして店内の電気を落としてもどうやって外にゾンビを出すかが分かりませんし・・・

仕方ないですね

諦めましょう・・・

まあまだ玉は沢山ありますし、事故が沢山起きてコンクリートが挟れてたりするのでそこから採取さいましよう

と、言うわけで諦めてパチンコ屋のすぐ近くにあるコンビニへいきましようか・・・

少しお腹がすきましたので何かをいただきましたましよう

・
・
・
・
・

「あそこが凄い五月蠅いのでコチラはゾンビがまったくいませんね・・・」

では何かを貰っていきましようか

食料を手に入れる場所があるなら缶詰などは食べないようにして残しておく方がいいでしょうし。

女性商品物色中・・・

はっ！

お、お酒・・・

．．．．．クツ！我慢しよう．．．
そんなにリュックを重くしたら大変ですし

うーん．．お湯とかないですしカップメンなどは無理ですね
おにぎりとかにしましょうか

取り合えずおにぎりをリュックへ詰め込み

コンビニを出す。

．
．
．
．
．
．

ヒュ、ゴッ！

「あゝっ！」

「ふう、さてどうしましょうか、食べたいですが、どこか安全な場所はありませんかね？」

道端だと危険すぎますし、何処かの家？

うーん・・・

・・・おや？

あそこに自衛隊などで使われてそうな車を置いてある家を発見。

・・・何処かで見たような気がするのですが・・・
気のせいですかね？

もしかしてこの家には何か武器とかあったりするのでしょうか・・・？
泥棒みたいで気が引けますが・・・

少しお邪魔してみましようかね・・・

しかしこの家本当に何処かで見たような・・・

第九話・家を検索しよう・（前書き）

先生のお友達、南リカさん宅の武器が一つ増えております。

主人公用の武器

第九話・家进行搜索しよう・

「さて・・・」

どこから入りましょうか・・・」

玄関へ行きドアに手をかける

ガチャガチャ

「私みたいに鍵を開けていく人はいませんか・・・」

それでは・・・

窓を割って入りますか

あえて二階の窓から入りましょう

敷地内をクルリと見て回ると

「あ、梯子がありましたね
これを使いましょう」

見つけた梯子を二階のベランダへと掛け、登る

「ふふ、ハク様、華麗に参上・・・」

何か自分で言ってる悲しくなりました・・・

「さて、ちょっと気が引けますが窓を割りましょうか・・・」

木刀を抜き窓に叩きつける

ゴンッ！ゴンッ！

バキャンッ！

よし、後は鍵を開けてっと・・・

あと、今の音で多数寄ってきたゾンビを上から狙撃して倒しておきましょう。

・
・
・

・

「こちらス。ーク、侵入に成功した」

さて、馬鹿な事はこれ位にして

色々見て回りましょうか。

ふむふむ・・・

おー

く、黒・・・

はっ！？お酒発見！

・・・

明らかにプライバシーの侵害な事を多数してしまいました・・・。

さて、まだ調べてないこのロッカー・・・

右側は開く、でも左側が開かない・・・

無理矢理開けましょう・・・

もうここまで来たら罪悪感が薄れてきました。

「さて、どうやってあけましょうか・・・」

うーん・・・

あ、そう言えばこのグローブには鉛が入ってましたね・・・

ピコン！（何かを思いついた）

私はロッカーを横に倒し、ロッカーを跨ぎ拳を構える

「せーのっ！ハッ！！」

垂直に拳を振り下ろす

ドゴン！！

おお～

ロッカーの扉がひしゃげて隙間が出来ましたね

「よい・・・しゅっ！」

隙間に手を入れて力任せに扉を開ける

ベキッ！

開きました。

ちよと乱暴すぎましたかね？
まあいいでしょう。

さてと、中身は・・・！

「まさかの銃器・・・」

何だかよくわからない銃がありますね

この家の人は何でこんな物を持ってたのでしょうか？

エアガンってわけでもなさそうですし・・・

ふむ、ゴチャゴチャしてる銃に・・・

拳銃がありますね

ゴチャゴチャの方は使えませんが

拳銃の方は使えそうですね

何でしょう？

デザートイーグル・・・ですかね？

これは使えるかもしれませんね

持っておきましょう

デザートイーグルの弾もリュックへ入れておく

それにしても初めて銃を持ちましたよ・・・

扱いには気をつけないと・・・

さて、今日はここで一晚過ごしましょうかね

一応安全ですし・・・

先ほど見つけたお酒も飲みたいですし

ちなみに自分でもお酒を持ってるんですよ？

ほら、家を出る前に入れたでしょ？

【飲み物】を。

水もちゃんとありますよ？

・ ・ ・ ・ ・

と、言う訳で飲んです！

コートなどを脱いだら何だか体が軽くなりましたよ。

「それにしてもテレビはどこもニュースですね」

今の時間帯はアニメをしてるNHKまでニュースですよ・・・」

と言うか、ニュースをする暇があるなら逃げればいいのでは？

「それより、こんなにのんびりしていいのでしょうか？」

何だかこの空間だけ平和に感じてしまいます・・・

門も閉めてますしゾンビも入って来れないでしょう

そう決めて私は飲む！

・
・
・
・
・
・

「ジュ、ジュ！」

ここがお友達の家よ！」

「鞠川校医、待ってください
中に誰かいるようですが？」

「本当だ、電気ついてる」

「家の回りに死体が転がってるって事は人の可能性が高いわね」

「どうしよう・・・」

「取り敢えず行ってみましょう
俺と先輩が先に行きます。」

・ ・ ・ ・ ・

主人公、デザートイーグルをGET！

第十話・再会を喜びましょう・（前書き）

白亜さんは何かすぐ覚醒できる出来事があればすぐに酔いが覚め
ます

第十話・再会を喜びましょう・

先生の友達の家へ入り手に持つ得物を構える

もしもこの家にいるのがく奴らゝならすぐに殺せるように

「先輩、僕が先に行きます」

「ああ、気をつけるのだぞ」

そつ言葉を交わし誰かがいる部屋へ入る！

「・・・・・・・・へ？」

「むにゃむにゃ・・・・・・・・」

中にいたのは気持ちよさそうに眠っている女性だった。

・・・・・・・・
「・・・・・・・・ね・・・・・・・・い・・・・・・・・」

「んん・・・む」

「さ・・・ね・・・せ・・・ぱい！」

「むにゅ・・・」

「再音先輩！」

んん？誰かに呼ばれてるような・・・？

「ううん・・・？」

おや？何故か毒島さんの顔が見えますよ？

「先輩！起きてください！」

「おやあゝ？」

藤美学園一の美女、毒島さんじゃないですかあゝ」

「何よ、この酔っ払い」

あゝ

あれは高城さん

あれ？これ現実ですか？

「白亜ちゃん、ここで何してるの？」

鞠川先生・・・

相変わらず大きいですね

「・・・え〜と、何してたんねしたっけ？」

あゝ

かなり酔ってたりします？私・・・

ポロツ、カシャーン！

あ、銃が・・・

「な！？コレはデザートイーグル！？」

平野君が驚いてますねゝ

「ああゝ

思い出しました。

お昼ご飯を買って、どこか安全に食べれる場所を探したらこの家を見つけて、二階から侵入して色々見て回ってたら銃器を見つけて、私でも扱えそうなコレだけを貰っておいて、あとテレビ見ながらご飯食べてお酒飲んでたらいつの間にか眠っていたんですね」

ふう、一息で言えました。

「そうだったのね」

「はい、先生達は何故ここに？」

「ここ、私のお友達の家なの」

何と・・・

凄い色々あさっちゃったんですが・・・

「しかし、無事で良かったです、先輩」

「毒島さんも無事でよかったですよ」

まあ毒島さんがやられるのが全く想像できないですが・・・」

「先輩？」

それはどういう事ですか？」

何でしょう？

見えない圧力のようなものが・・・

「そ、そう言えば小室君！」

「え？あ、何ですか？」

「井豪君はどうしたんですか？」

今の私の言葉で小室君と宮本さんの顔が悲しみに歪む

「そうですか・・・

井豪君はもう・・・」

こんな状況ですから覚悟はしていましたが

やはり仲の良かった方が亡くなるのは悲しいですね・・・

「そう言えば白亜ちゃん！」

鞠川先生が私の名前を呼ぶ

その顔は何か少し怒っているような・・・？

「あなた未成年でしょ！
なのにこんなにお酒飲んじゃうなんて！」

「それが何か！？
好きなんですからしょうがないでしょう！」

「でも未成年何だから飲んじゃダメ！
未成年じゃなくても飲んじゃダメ！
お酒は体に悪いのよ？」

「大丈夫です、もはや私にとってお酒は水のような物ですから！」

何かかなり無駄な口論をしてる気が・・・

「というか、先生もお酒飲むでしょう？
しかも先生の場合酔ったら未成年の人にもお酒飲ませるじゃないですか」

「う・・・」

「ホラホラ、先生、まだまだ、お酒残ってますよ
こんな口論は止めて一緒に飲みましょう」

「うう」

お、お風呂に入ってからね！」

勝った！勝ちました！

「ではお風呂から出たら飲みましようか
さっぱりして来て下さい」

さて、じゃあ私は平野君がいますから銃の事を聞いてみましょうか

「何言ってるの白亜ちゃん？
あなたも一緒によ？」

・・・え？
私も・・・？

アンケート的な何か

続きを楽しみにしてたりした人はすまぬ！

ちよいアンケートだ！

では始めます

1・白亜さんについて

？このままの性格でいい

？もう少しはっちゃんけて欲しい

2・百合について

？（b ^ _ °）

？（p ° _ °）

3・もし百合がいいというなら誰との百合がいいのだね？

？冴子さん

？鞠川先生

？ありすちゃん（あ

？その他

以上！

まあ百合云々は賛成の方が多くても実行するかわからんがな！

実行しても

例えばこう

冴子↓白亜↓酒

みたいになると思う（あ

白亜「お酒が恋人ですが何か？

好きなんだからしょうがないでしょう！」

第十一話・気長に待ちましょー・（前書き）

アンケート結果！

白亜については

？そのままでもいい

百合については

？！（b^_°）

誰がいいか

冴子さんとありすちゃんが多かった・・・

まあ百合云々に関してはマジでオマケみたいな質問だったので実行するかは分かりませんが！（あ

さて、

お風呂を楽しみにしてた人がいたらすいません！

第十一話・気長に待ちましよう・

「いや、無理でしょう?」

「え?何が?」

「ですから、私は先ほどまでお酒を飲んでいたのでお風呂に入るとダメじゃないですか?」

「ああ!そうだった!」

え……

先生……あなた、医療関係の人じゃないですか

恐るべし天然さん

「それじゃあ、しょうがないかあ
一緒に入りたかったけど……」

「まあ、またいつかと言う事で」

・
・
・
・

・
・
・

「さて・・・」

どうしよう?。」

平野君に銃の扱い方を聞こうと思ったんですが・・・

「うふふふふ・・・」

「ひ、平野?」

私が見つけた銃を見せたら小室君が引くほど平野君が変になってしまいました。

そんなに好きなんですか・・・

「平野君がトリップから戻るのをテレビでも見ながら気長に待ちましょうか」

おや、ここからすぐ近くの場合にテレビ局がきてるんですね

こんな状況なのに、ご苦労様です

「あの、再音先輩？」

「ん？どうかしましたか、小室君」

「先輩はこれからどうするんですか？」

ふむ、これからどうするかですか

「いえ、ぶっちゃけ一人だと寂しいので同行したいんですが」

はくあ が 仲間になりたそうに こちらを みている！

仲間にしますか？

「あ、別にいいですよ
と言うか元々そのつもりでしたし」

「そうでしたか、ありがとうございます、小室君」

「……………」

「?どつかしましたか?」

「あ、いや、先輩、僕に敬語使わなくていいですよ?」

ああ、その事ですか

「気にしないでください。」

私はどんな人にも基本敬語ですから」

毒島さんにも最初言われましたね

女に転生しちゃったけど女言葉はなかなか慣れなかったので敬語で話すようにしたら定着して今に至ります。

たまに可笑しな敬語になったりしますが

「そうなんですか」

「そう言うつ小室君こそ私に敬語なんて使わないでいいですよ」

「あ、それはちょっと・・・」

「まあ、おいおい、と言つことだ」

・
・
・
・
・
・
「うへへへへ・・・」

・・・どうしましょう？

平野君が未だトリップしてるんですが

「銃の事を教えて欲しかったんですがねえ」

まあ、うん、あとでも大丈夫ですかね

「は・く・あ・ちゃん♪」

「ふおおお！？」

せ、先生？

もうお風呂から上がってたんですね」

吃驚しました。

先生がいきなり私の背に抱きついてきましたので

どうせなら平野君に抱きついてトリップから戻して欲しかったです。

「えへへ・・・」

「・・・あれ？」

先生酔ってないですか？」

「酔ってないよぉ」

うん、酔ってますね、この人

ていうか一緒に飲む予定じゃありませんでしたか？

あ、あれですか、予定は未定ってやつですか

「はあ、分かりましたから先生、抱きつかないでくださいよ」

「やぁ～だぁ～」

おんぶう～」

え？何、幼児化？

まあ、いいですけど

取り敢えず先生は寝かしつけましょう

それでは背負って一階に降りますか・・・

「ひゃうん！」

まあ、はくあちゃんのエッチい」

はい、バスタオル一枚から予想は出来てましたがこの人、下着つけてませんね

「全く、ここには男性もいるんですから・・・」

まあ、トリップしてる平野君と宮本さんに捕まってる小室君だけです

私も男のままでしたら押し倒してますよ

まあ私はノーマルですが

と言うより彼氏とか欲しくないですし

と、言うわけで一階に来ましたが

「毒島さん・・・」

「な、なんですか？」

その哀れむような目は・・・」

裸エプロンって・・・

「襲われないのが奇跡に近いですよ・・・」

もう、一番真面目なのが高城さんのみと言う

まあいいです。

先生を寝かしつけます。

「むにゃむにゃ」

もう既に寝てますけど・・・

第十二話・女の子を助けましょう・（前書き）

今更だけど

何でこの作品だけ名前を変えてるんだろう？

飛妖に戻そうか・・・

いや、まあ今更だしいいか

第十二話・女の子を助けましょう・

さて、先生は寝ましたし（全裸で）

私はどうしようかね

「そう言えば毒島さんは何をしてるんですか？」

現在男性誘惑度EXの毒島さんに聞いてみる

「いえ、何か食べ物と、思いまして」

「なるほど、食べ物ですか、そう言えば私がコンビニでできる限り
詰めて来たおにぎりがありますが食べますか？」

「いえ、私は結構です。小室君達に差し上げてください」

「そうですか？」

欲しくなったら言うてくださいね」

そう言い私は小室君達のいる二階へ上がる

平野君はトリップから戻ったでしょうか・・・？

二階へ行くと平野君と小室君がベランダに出て話していました

よかった、帰ってきたんですね、平野君・・・

「どうも、あのようなモノを見て食欲があるか分かりませんが、おにぎり食べますか？」

私は二人に声をかけ、おにぎりを渡す。

シーチキンマヨネーズおいしいですよ

「あ、先輩、ありがとうございます」

「いえいえ、盗んで来てる物ですから、お礼なんていりませんよ」

店員さんいませんでしたし

・ ・ ・ ・ ・

まあ、それにしても夜になって道にゾンビが増えてませんか？

と、いつか夜にゾンビと言うのが妙にマッチしていて恐いですね

「！ あれ！」

そんな中、平野君が何かに気づきました

「どうしました？」

平野君の視線の先を見てみると

「あれは・・・」

女の子がゾンビに襲われそうになっています！

「ロックンロール！！」

平野君が銃を撃ち

女の子に迫っていたゾンビの頭を撃ち抜く

流石ですね

でも女の子が危険な事には変わりありません

助けに行きましょう！

「では小室君が女の子を助けに行ってください」

「え・・・」

「私はあのゾンビ達を引きつけますから」

「！？ 何を！」

その方が危険なく助けられでしょうし

まあ、私の場合は一歩間違えたら終わってしまいますが

「私は大丈夫ですよ

根拠はありませんがね」

よしフル装備で行きましょうか！

第十三話・死なずに頑張らしよう・（前書き）

ちよつとの間書いてなかったから何か劣化した感が・・・

第十三話・死なずに頑張りました・

防弾コート、防刃グローブと、できる限り噛まれても生き残れる装備に身を包む

「先輩！ やっぱ僕が囷になったほうが・・・」

「もう決定事項です。

こうしている間にも女の子が危険な状況なんですから！ さっさと準備をして下さい！」

バイクを運転出来る小室君の方がいいのですよ

私はスクーター位しか乗れません

免許ないですし

・ ・ ・ ・ ・

私、この囷を終えたらお酒を沢山飲むんです

・・・自分で余計生き残る確立を下げってしまったような・・・？

「では、私が合流出来なければ遠慮なく行ってくださいね」

「そんな事っ！」

「いいんですよ、私一人の為に皆さんが危険な事をしてはいけません
大丈夫ですよ、私は絶対死にませんから」

だからそんな心配そうな顔しなくてもいいですよ。

「そうですね・・・」

じゃあ、先生にあのお胸様をこれでもかと言うくらい揉みたかった
と言っておいってください
・・・冗談ですが」

「わかり、ました。」

いや、冗談ですよ？

毒島さん？ 冗談ですよ？

「まあ、いいです。
それじゃ、行ってきます。」

・ ・ ・ ・ ・

私は塀へと登りデザートイーグルをゾンビへ向け撃ちます

「おお、初めて撃ちました・・・

この大きさの音ならかなり寄ってくるはず」

引き続き、ゾンビ達に撃ち私の方へおびき寄せます。

ですがこれは・・・

塀に登ってるから大丈夫ですが、塀から落ちたら洒落になりません
ね・・・

落ちないように細心の注意を払って移動しなければ・・・

・ ・ ・ ・ ・

銃声が響く。

その銃声に大勢の<奴ら>が先輩の方へ進んでいく。

「これなら・・・」

バイクのエンジンを掛ける

<奴ら>の大半が先輩の方へ言っている
今なら難なく女の子を救出出来る

「頼むぞ、孝君」

「はい！」

門を開き、アクセルを回す

「行きます！」

バイクを発進させ女の子がいる場所へと行く。

そしてそのまま、まだ残っているゾンビを跳ね飛ばす。

「大丈夫か！？」

僕は女の子に手を伸ばす。

女の子は驚き固まっていたがすぐに手を伸ばしてきた。

そして女の子をバイクに乗せて来た道に戻る！

・ ・ ・ ・ ・

ふう、何とか女の子を救出できたようですね。

よかったよかった。

さて、私も戻りましょうか・・・

第十三話・死なずに頑張りました・（後書き）

今思った・・・

囲をやってゾンビほとんどいなくなっただんならバイクで行く必要は
なかったんじゃない・・・

まあいいか！

番外編く短編集く（前書き）

今日・・・ていうか昨日かドラゴンエイジを買ったら毒島さんが付いて来たよ

とりあえずエプロンを剥ぎ取ったのは僕だけじゃないはず・・・！

番外編く短編集く

注意：今回は番外編だからここぞとばかりはっちゃけてます。
言動が変わったりなどはしません。白亜がテンション高いです。
そんな白亜を見たくない人はすぐさまモデルを！
ちなみに時系列、設定むちゃくちゃ

・
・
・
・
・
・
・
その1 - 中の人 -

「小室君」

「あ、再音先輩、どうしたんですか？」

「ちょっと、ゾンビ達の前に行って
『別に、奴らを倒してしまっても構わんのだろう？』って私達に背
を向けて言ってみてください」

「何で！？ 危な過ぎませんか！？
ていうか、何ですかその格好付けた感じのセリフは・・・」

「いや、もしかしたら固有結界とか使えるかもしれないじゃないですか

というか、世界がこんな状態なんだから抑止力として英霊工。ヤが出てきたりしないでしょうか・・・」

「先輩は一体何を言っているんだ・・・」

その2 - 中の人2 -

「高城さん」

「何よ？」

「高城さんって自分で『私は天才』って言ってますよね？」

「それが何よ？」

「その『天才』って部分を『完璧』にして、『私、完璧！』って言うてみてください。」

「私、完璧！」

「おおふ・・・」

「何よ？」

「いえ、まさか言うてくれるとは思わなかったのだから」

その3 - ボインボイン -

「先生」

「ん？ 何したの？ 白亜ちゃん。」

「先生は一体何をしてそこまで大きくなったんですか？」

「えゝと・・・？」

「・・・」ジー

「・・・胸？」

「・・・」コクコク

「うーん、わからないなあゝ
気がついたら大きくなってたから。」

「へえゝ、そうなんですかー」

「それがどうかしたの？」

「いえ、一つ相談がありました・・・」

「相談？ 何々？」

「お願いします！ そのお胸様を揉ませてください！」

「え、ええ！？」

「・・・・・・」ワキワキ

「な、何？ その手？」

「・・・・・・」ジリジリ

「い、いや、だめ、来ないで・・・・・・」

「・・・・いやああああ・・・・」

「あれは何してるんだろう？」

「仲良いわね。」

その4 - ノーブラ -

「先生の胸を揉んでて思いましたが、私の胸って何カップくらいなんでしょうか？」モミモミ

「シクシク・・・・もう、お嫁に行けない・・・・」

「私、ブラジャーなど付けた事ありませんから分からないんですよね」

「」「なん・・・・だと？」「」

「ふおっ！？ 皆さんいつの間に・・・！？」

「先輩・・・ノーブラって本当ですか？」

「え？ ええ、まあ

ブラジャーって何か違和感があって付けないんですよ」

「何と・・・！ 私でさえブラジャーをしてるのに・・・」

「裸エプロンよりはマシでは？」

「ていうか、ブラジャーなしでここまで胸の形がいいなんて・・・」

「そんなにいいんですかね？」

「・・・ふふふ、いいことを聞いたわ・・・」

その5 - 逆襲 -

「隙ありっ！」

「ひゃっ！ せ、先生？ 何を・・・！」

なんと、ひゃっ！ とか言ってしまいました・・・

「うふふふ・・・
さっきのお返しよ」

覚悟しなさい、白亜ちゃん」

ああああ・・・

まさか逆襲とは・・・！

「それぞれ！」モミュモミュ

「あ・・・ん・・・」

や、ヤバいです

今、先生に負けてしまったら大切な何かを失ってしまいそうです・・・

何とかしなくては！

「せ、先生？ 先ほどの事は謝りますから、許してください、ひゃん」

あ、今軽く、大切な何かにひびが入りました

「うふふー、だめえ、許して上げない」

モミュモミュモミュモミュ

「あつ！ んん・・・！
はあ、だめ・・・ん・・・」

「何だか楽しくなってきた〜！
それそれ〜！」

「ふあつ！？」

・・・しばらくお待ち下さい。・・・

その6 - 終 -

「あれは一体・・・」

「何か立場逆転してるわね。」

「ハアハア・・・」

「平野、妄想を抱いて溺死しろ。」

「何その決め台詞みたいなの。」

「いや、再音先輩に『〜』を抱いて溺死しろ』って言ったら格好いいですよって言われて・・・」

「何で実行してんのよ。」

「……終了……」

超番外編・集合・（前書き）

やっちまったぜ・・・！

こんなんやつてる暇があるなら本編かけよ、と。

ちなみにこの番外編は他二作品にも掲載されております。

超番外編 - 集合 -

とある世界、そこは大量の死人、所謂ゾンビにより滅亡の危機に瀕していた！

そんな壮絶な世界は1から5へ5から10へと様々な物語を展開しながら増えていった。

この話はその中の三つの世界の主人公達が作者と言われる理不尽な神の悪戯により出会ってしまった話です。

・
・
・
・
・
・
・

side - 白亜 -

シューウウウン

「？ 何でしょうか？ これは・・・？」

この灰色の・・・オーロラ？みたいなモノは一体・・・

ん？ 何故かどこかで見たとがあるような・・・？

何でしょう？　もしかすると転生前に見たことがあったのかも知れませんね。

きつと、テレビなどで、こんな、いきなり地面から上ってくるオーロラもないでしょうに。

それはそうと・・・

「何かコレ、近づいて来てませんか？
近づいて来てますよね？」

逃げられない感じでしょうか？

後ろからも迫って来てますし。

まったく、ゾンビだけでも非日常なのにさらに変なオーロラですか・
・

そこまで貴重な体験、別にしたくないのですがね。

・
・
・
・
・
・
side - 蓮児 -

シューウウウン

「おおっ！　これはっ！？

オーロラ！

鳴滝か？」

辺りを見回す、うん、誰もいやしねえ・・・

「何だろうな・・・？

入れてか！？

フツ、いいだろう。

入ってや「早く行きなさいよ。」るううう！？」

ちよっ！？　高城さん？

何でっ！？　何でそんなナチュラルにドSなんすか！

てか、何故、おぜう様だけいるんだ？

冴子とか、孝とかコータとかは？

まあ、うん、なんやかんやで潜っちゃった

・ ・ ・ ・ ・

s i d e - 伊里夜 -

シューウウウン

「ふえ？

何これ？」

変な灰色の何かがいきなり出てきたよ！

「バーサーカー、何かなこれ？

触れるかな？」

バーサーカーに灰色の変なものに近づいて貰って観察する。

「むうん・・・

何だろね？」

よくわかんないから、ちょっと触ってみようとしたら、いきなり変なのが私達に近づいてきて、私達は変なものの中に入っちゃった。

・
・
・
・
・
・
・

うーん・・・

変なものの中に入っちゃったけど・・・
別に何時もと変わらないよ？

「バーサーカー、どうしよつか？」

取りあえずバーサーカーと一緒に考えてみよう！

バーサーカーと話しながら（と言ってもバーサーカーは喋らないけどね

でも、不思議とバーサーカーの言いたい事はわかるよ。）道を歩き。

私達は十字路へと差し掛かった時

「あれ？」

「え？」

「なん・・・だと？」

・
・
・
・
・
・

side - 蓮児 -

さて、ツンデレラ様に蹴り飛ばされてオーロラ潜っちゃったが、別に変わらねえ・・・

強いて言うならゾンビ共が見当たらんって事が・・・

さてさて蛇が出るか蛇がでるか・・・

あれ？ どっちも同じじゃん・・・

どっちみち危険ってか？

ま、まあ、デイケイドライバーは取り出せるし、大丈夫・・・だよ
ね？

結構不安ですが何か？

まあ、そんなこんなで歩いていると十字路に差し掛かった。

「なん・・・だと？」

「あれ？」

「え？」

・
・
・
・
・
・
・

side - 白亜 -

さて、オーロラに飲み込まれたのはいいですが、景色が変わらないのは気のせいですかね？

まあ、何もないならそれでいいんですがね。

もしもの時の為にフル装備ですが。

取りあえず

毒島さん達と合流しましょうか・・・

というか、何故私は皆さんと離れているんでしょう？

何か陰謀を感じます・・・。

などと考えながら歩いていると十字路に差し掛かり・・・

「え？」

「あれ？」

「なん・・・だと？」

・
・
・
・
・
・

「え、ちよっ!?!」

ズドオオオオン!!!!!!

「危なっ!?! ちょ、危なっ!?!」

いきなり攻撃て・・・

ならばやってやるよ!?!

バックルを腰に付け、カードを取り出す。

「変身!」

【KAMEN RIDE!!】

【DECADE!!】

「さあ、お前の罪を数えろ!」

ライダー違いだけど!

・
・
・
・
・

side - 伊里夜 -

お兄ちゃんが無駄に面白い顔をしてたから眺めていたら

バーサーカーがいきなりお兄ちゃんに攻撃した。

「バーサーカー！？ 何をしたの！？ 何で・・・！」

どうして攻撃したのかバーサーカーに聞こうとしたら

「変身！」

そんな言葉が聞こえた。

お兄ちゃんの方を見るとカードを腰の変なものに入れて、姿が変わっていた。

「へ、変身だあ！」

「ディ、ディケイドだあ！」

わあゝ、凄い凄い！

仮面ライダーって本当にいたんだあ！

あ、じゃあバーサーカーがお兄ちゃんに攻撃したのって・・・

「・・・・・・・・」

「分かったよバーサーカー！ 頑張って怪人役をやるう！」

「・・・・・・・・Σ（。□。；）」

・
・
・
・
Side - 白亜 -

「最近現れた新しい力だ！」

【KAMEN RIDE!!】

【OOO!!!】

「わあっ!？」

オーズだっ! よーし、やっちゃえ! バーサーカー!

「■■■■■■————!!!」

……何ですか、コレ?

何故か唐突に始まった、妖怪大戦争。

私、完全に置いてけぼりですね。

まあ、あんなのに銃やらなにやら効かなそうだし、いいんですけど。

「そおい!!」

【FORM RIDE!!】

【GATAKIRIBA!!】

おや、緑色に変わりましたね。

ていうかインパクト強すぎで思い出しましたよ。

あれ、転生前にたまに見ていた仮面ライダーですね。

あのオーロラも多分仮面ライダーで登場してたモノでしょう。

まあ、それはさておき、この超バトルを見るのはなかなか楽しいですが私は何時帰れるんでしょうか？

こういうのって決まって何かありますよね？

例えば・・・あの何の変哲もない場所とかに・・・

ビシュッ!!（スリングショット音）

「ぐわっ!!」

「ふおお!? ホントにいた!?!」

「くっ・・・おのれ、ディケイドおおお!!」

シューウウウン

あ、どこかへ行つてしまいましたね。

一体何だったのでしょうか？

おや？ また、あのオーロラが・・・

「今度は速つ・・・」

言葉を言い終わる前に白亜はオーロラに飲まれた。

・ ・ ・ ・ ・

side - 蓮児 -

俺とバーサーカーがバトルを繰り広げている最中にまたオーロラが現れた。

「何っ！？ いま良いところなのに!？」

そんな声もむなしく蓮児は元の世界へと強制送還されました。

・ ・ ・ ・ ・

side - 伊里夜 -

「行け行け！ バーサーカー！ ってあれ？」

また、あの変なのが出てきた！

ずんずん近づいて来てる・・・

よく見るとお兄ちゃんの方にも出てるみたい。

まだバーサーカーとディケイドの戦い見たかったんだけどなあ

ま、仕方ないよね！

そして、伊里夜達も元の世界へと帰った。

・ ・ ・ ・ ・

side - 白亜 -

「結局何だったんでしょうか？」

やはり、あの変なおじさんが鍵みたいなものだったんでしょうか？」

なんとまあ、呆気なかったですね・・・

まあ、帰れましたよとしますか。

そもそも、私のいる意味は一体なんだったんでしょうね。

・
・
・
・
・
・

side - 伊里夜 -

「あゝ、楽しかったねゝ
バーサーカー。」

でも、どうして、デイケイドがいたのかなあ？
変身してた人も違うよねえ？

「んゝ、ま、いつか！」

・
・

・ ・ ・

side - 蓮児 -

まあ、なんやかんやでバーサーカーと戦って帰ってきたが・・・

「結局何だったわけ？」

まあ、オーロラを通ったからあそこは別の世界だったんだろうが・

・

何故、バーサーカー？

あと、カッコいい弱音ハクもいたし・・・

本当になんだったんだ・・・

いや、まあ面白かったからいいけどさ

ハクさんとも話たらよかったかな・・・

・

・

・

・

・

side - 皆さん -

「でも、まあ総合的に言えば」

「結局何だったの（でしょう）？」

- END -

第十四話 - 睡眠は大事なんですよ - (前書き)

久しぶりに更新した……

第十四話・睡眠は大事なんですよ・

「ただいま戻りました」

戻る時は音をならしたりしないため、ゾンビが来ないので楽に戻れましたね

「先輩！　大丈夫でしたか？」

毒島さんが来る

心配かけてすみません

「私は大丈夫ですよ
女の子は大丈夫でしたか？」

「はい、怪我もなく大丈夫なようです。
しかし、あの子の父親はもう……」

「そうですか……」

あの子ほどの年の子はまだまだ甘えたりないでしょうに……

「あの子は私達と一緒に連れて行くんですね？」

「そのつもりです」

・ 親代わりとはいいいませんが、寂しくならないように努力しましょう

・ ・ ・ ・ ・
あの後女の子、希里ありすちゃんと自己紹介などをしたあと、ゾンビがまた大量に辺りにやってくる前にここを移動しよう、と言う事になりあの家にあった自衛隊が使いそうな車（平野君曰わくハンヴィーと言っらしい）に乗って出発しました

しかし、いくら先生の友達だからと言っても色々パクリすぎじゃないでしょうか？

借りる、というか完全に借りパクですもんね

まあ、このご時世ですしいいん、でしょうかね……？

話は戻りますが、只今皆さん就寝中です

先生の友達の家から出て、高城さんの家に向かっていたのですが、取り敢えず寝よう！って感じになって寝ています

水の上で。

一体なにが起こっているかと言えば、ハンヴィーで川の中に入って寝ているんですよ

川の中にまでゾンビは来ないでしょうし、いや、かならずしも来ないとは言いきれませんがね

ちなみに私は見張りです

車の屋根に座りお酒……は飲んでいたら見張りにならないのでお茶を飲みながら見張っています

私だけあの家で酔って寝ていましたからあんまり眠くないんですよ

毒島さんも最初は一緒に見張りをすると言ってくれていましたが、私がにこやかに大丈夫と言ったら何故か素直に寝てくれました

どうしたんでしょうね

それはそうと、先生には驚きました

あの家から出発するちょっと前に先生が

「あの、ね……」

先生も恥ずかしいから、みんなから見えないところで、ね？」

と、言われた時は私は一体何をしてしまったのだと本気で考えてしまいました。アレでした、私が女の子を助けるために罔をやった時に毒島さんに言った

『先生にあのお胸様をこれでもかと言うくらい揉みたかったと言っておいてください』

「……冗談ですが」

と言う言葉を『冗談ですが』の部分だけを抜かしてそっくりそのまま言ってみたんです

だから先生が胸がキュンとなるような表情であんな事言ってたんですね

正直まだ酔ってるのかと思いました

しかし毒島さんって以外にS?

それとも天然入ってるのでしょうか……?

普段キリツとしてクールですが寝顔と寝起きが凄く可愛いですよ

まあそれを言うと、強さが二割増しになりますがね、私に対して。

「ふう……」

そろそろ夜も明けそうですね」

さて、今日も一日頑張りましょう

……それはそうと、お風呂に入りたいです

あの時やはり入っておけばよかったですね

第十五話・使えなさそうな物でもきつと役に立つ時が来ます・（前書き）

久々の更新。

たまに思う。

白亜さんの銃、ベレッタとかのが良かったんじゃないかね？って……

第十五話・使えなさそうな物でもきつと役に立つ時が来ます・

と、言うわけで朝になりました

みんなを起こし、川を渡ります

・
・
・
・
・

川を渡りきり、河原で毒島さん達、女性陣が着替えるそうなので少し待ちます

「白亜ちゃんは着替えないの？」

先生が私にたずねます、が

「私はもう、着替えてますよ？」

「え？ でも、昨日と変わってないよね？」

「ああ、私のこの特注の（弱音ハクっぱい）服は予備が何着かありまして持って来てたんですよ

それを先程思い出しまして、皆さんが寝てる間に着替えました」

「と、という事は僕達が寝てる間にストリップショ「おい、平野」

平野君が何か言って、小室君に止められています。

「その服特注だったんだ……」

「確かに、よく見ればあまり見かけない服ですね」

先生と毒島さんが言う

まあ、防弾コートを着てましたからよく見る機会はなかったでしょうね。

「と、言うわけで私は危険はないか見て来ますので皆さんは着替えてきてください」

そう言い私は坂を登り道へと出る

……危険はないですね

というか本当にゾンビがいるのかという程なにもいません

静かですね。

・
・
・
・
・
・
・

「お待たせ！」

しばらくして、皆さんが着替えを終えて来ました

皆さん武器を装備していますね

平野君が使い方を教えるみたいです

いや、まあそれにしても……

「毒島さん……」

「な、何ですか？」

「毒島さんって、もしかして羞恥心がないんですか？」

そのスカート、スリットが深すぎて下着見えてるじゃないですか

昨日も裸エプロンでしたし……

「私だって羞恥心ぐらいあります。

多少……」

「今ボソツと言いましたね？」

ふう、まあいいです。

露出癖とかじゃないだけマシです。

・
・

・ ・ ・ ・ ・

「わっ、ここも！
もういや！」

「じゃあそこ左、左よ！」

今、私達はゾンビ達を回避しながら住宅街を移動しています。

いや、ついさっきまでびっくりするくらい何もいなかったのに、いきなり増えてきまして

一気に地獄に落とされた気分です

一度安全な場所に行った方がいいですね

この近くに安全な場所があるのかは分かりませんが

「駄目よ、駄目！
停めてええ！！！」

宮本さんが叫ぶ。

車の進行方向をみると

「ワイヤーが張られています！
車体を横に！」

そう先生に叫ぶ。

ズギヤギヤギヤギヤ！！ ドガッ！！

車体が横を向きワイヤーに激突する、そしてそのまま車は壁へと直進する

「先生！ 前っ！前っ！！」

先生が慌てて車のブレーキを踏み急停止させる。
だが、

「え？」

その反動で上にいた宮本さんが車から落ち、地面へと叩きつけられる。

「あ っつ！

っ……」

「麗っ！」

小室君が飛び出し、宮本さんへと群がるゾンビ達をショットガンを使い蹴散らす。

「小室君！ 私が支える！
その間に宮本君を！」

冴子さんが車から降り、木刀構える。

「駄目です、毒島さん
数が多すぎます」

「しかし!!」

「ですのでコレを使います」

そう言つてリュックからある物を取り出す

「それは、空き缶……ですか？」

「はい、一応捨てずに持つておいて良かったです。」

「そんなのでどうすんのよ！」

高城さん、そう怒鳴らず落ちついてください。

このような状況だからこそ冷静でいなくては簡単に命を落としてしましますよ

私はすぐさま、車の上に登り

「コレをこつ、使います」

空き缶を強引にスリングショットでゾンビ達の背後の方へ飛ばしま

す。

カンッ！カンッカラカラカラ！

空き缶は地面に落ちアルミ特有の甲高い音を立て転がっていく

その音を聞き、ゾンビが缶の方へ群がる

しかし、ちゃんと飛びましたね。

空き缶ですから、普通に投げたんじゃ飛距離がありませんし、スチール缶だったら大丈夫だったんですが、お酒のスチール缶って見たことありませんね

「今です、毒島さん

音に釣られなかったのを叩いてください！」

「分かりました！」

毒島さんが少数のゾンビを蹴散らしている間に

「小室君、宮本さんを連れて、ワイヤーの中へ行ってください
先生達も早く！」

皆さんをワイヤーの中へ避難させる

そして、毒島さんが相手をしているゾンビにスリングショットで鉛

玉を打ち込み倒す。

「毒島さんもワイヤーの中へ！」

「はい！」

毒島さんがワイヤーを越えるまで、追ってくるゾンビを何体か倒し私も避難する。

「ふう……」

何とかかなりましたね

皆さん、無事ですか？」

「ええ、何とか」

「高城さんの家はもうすぐ何ですか？」

「え、ええ、すぐそこよ」

「そうですか、では行きましょう。
宮本さんの治療もしたいですし」

あのワイヤーは誰が張った物かは分かりませんが、この先に確実に人はいますね。

吉と出るか凶と出るか……

ま、とにかく行ってみましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9187m/>

学園黙示録の世界に転生してしまいました。

2011年4月8日12時07分発行